1930年の郁達夫
——左翼作家連盟からの「除名」をめぐって

李　　天琪

はじめに

郁達夫の人生の軌跡を概観すると、以下のようになる。1896年12月中国浙江省に生まれ、1902年に私塾に入ってから、小学校、中学校を経て、1913年まで中国で教育を受けた。1913年10月に来日し、高等教育を受けながら十年近くの留日生活を送った。日本滞在時に、文学創作を始める。1915年、第八高等学校の刊行物「校友会雑誌」で詩を発表し始め、翌1916年、詩人服部担風[1]を訪ね、二人は忘年の交わりを結んだ。この一年の作詩の数は五十首以上に上り、大半の作品は中国国内や日本の新聞、雑誌に発表された。1919年、東京帝国大学経済学部に進学し、小説「圓明圓之夜」（未完）を創作した。1921年、郭沫若、鄭伯奇、成仿吾らと創造社を創立し、同年、小説集『沈淪』が上海泰東書局により出版され、作家として正式にデビューして名を知られていく。1922年7月に最終的に帰国し、帰国後は、安慶、上海、北京、武昌、広州と職を求めて転居し、1927年、王映霞と結婚以降、中国の現代文学史における事実上初めての個人文学全集が出版され（1933年夏まで7冊[2]）、精神的にも経済的にも次第に安定した生活に入った。1935年11月発表の「出奔」まで、作品数は47篇（全集に収録された小説46篇、劇曲1篇）にのぼる。彼の上海と杭州における生活は1936年2月に福建省参議として赴任するまで続いている。この時期、彼は大量の「遊記」（旅行記）を執筆した。1938年12月、『星洲日報』の招きに応じて編集者としてシンガポールへ移住する。1942年2月、スマトラ島へ避難し、趙廉と改名した。1945年8月スマトラ島で日本憲兵に殺害された。享年48歳。

郁達夫に関する先行研究は、個人史研究から小説研究まで非常に多い。日本では、伊藤虎丸（以下、敬称は略させていただく）たちが整理した詳細な『郁達夫資料総目録』[3]がある。また、最初に郁達夫のスマトラ島における死亡の真相を究明したのは鈴木正夫[4]はじめ日本の研究者たちである。郁達夫研究については、文革の影響もあるのだろうが、中国より日本の方が幅広く進んでいたと言えよう。郁達夫は1922年の日本留学期間中に作家としてデビューしており、彼の作品は日本でも戦前から翻訳され、その作風は日本人に愛読された。そうした問題をめぐっては、大東和重[5]に郁達夫と日本の大正文学との比較研究があり、貴重な成果を生んでいる。

中国でも、郁達夫が現代文学史における重要な作家として位置づけられているのは断るまでもない。1980年代以降、中国でも郁達夫研究は重視されてきた。代表的なものとしては陳子善、王自立が編集した『郁達夫研究資料』[6]があり、非常に詳しい郁達夫年譜『千秋飲恨』[7]もある。2007年には、現段階で郁達夫の作品を最も網羅的に収録した『郁達夫全集』[8]が出版されている。

郁達夫の創作活動をトータルに考える際には、一般には1927年を分岐点として、前期と後期に区分している。郁達夫が帰国後、前期から後期に変わっていく時期、即ち、この1920年代末から1930年代の上海を中心とする活動と創作についての研究はかなり重要であろう。だが、現在の研

究状況から見れば、この時期についての研究は進められてはいるものの、まだ未解明なところがかなり存在している。1927年に郁達夫が「広州事情」[9]を発表した後、旧友との衝突によって創造社から脱退したことについては、鈴木正夫[10]が詳しく論じている。鈴木の研究の後の時期、即ち、1920年後半の郁達夫の「左翼化」に関する問題については、李麗君[11]が検討している。その結果、1927年以降における郁達夫の「左翼化」の傾向は一つの大きな特徴であることが明らかにされている。郁達夫の「無産階級文学」への強い関心は1927年から始まり、中国左翼作家連盟（以下左連と略称）への加入が一つの「頂点」を示すだろう。しかし、郁達夫と左連との関係に関する研究は極めて少ないのが事実である。創造社から脱退した後、郁達夫は魯迅と親しくなり、左連にも参加したが、何故一年未満で除名されたのか。その経緯はまだ十分に解明されてはいない。また、郁達夫は左連からいかなる影響を受けたのかについての研究も、管見の限りほとんど見られない。郁達夫の後期創作、特に、彼のその創作に対する態度を明らかにするための作業の一環として、まず、郁達夫の左連加盟時期の状況について詳しく考察することが本稿の目的である。

I、左連に参加してから脱退するまでの経緯についての考察

本章では先行研究（年譜、伝記、回憶録など）を踏まえつつ、1930年の一年間における郁達夫の左連に関わる活動を整理しながら、左連に参加し脱退した経緯を明らかにする。

2月30日、国民党の独裁に反対して言論、出版、結社、集会の自由を主張した団体「中国自由運動大同盟」が上海で成立した。郁達夫は発起人の第一位に名を列していた。これについて、郁達夫は「魯迅と私はともに自由大同盟の発起人で、その後も幾度も幹部に再任された。南京の逮捕令状が出されて楊杏佛[12]が暗殺されるまでそうだった[13]」と言ったことがある。郁達夫が自由大同盟の幹部として活動したことは確かであろう。

左連の主要メンバー、夏衍の回憶録[14]によると、左連の結成準備作業は1929年から始まった。夏衍は郁達夫について、魯迅に関わる以下のようなエピソードに言及したことがある。

> 続いて彼（魯迅）は発起人の名簿に目を通した。彼の知らない人が何人かいたので、私たちは一人一人紹介したが、彼も不同意は示さなかった。最後には、彼は、なぜ郁達夫が発起に加っていないのかと質問した。私たちは、郁達夫は最近情緒不安定で、また普段は旧友と往来しないと説明した。魯迅は聞いた後、賛成していない様子で、それは一時的な状況で、郁達夫に参加させるべきだと思う、彼は非常にいい作家だと思うと言った。私たちは同意した。しかし本人の意見を聞かなければならないと私たちが言うと、魯迅も賛成した[15]。

そして、郁達夫の家を訪問した際の状況についても、夏衍は以下のように回憶[16]している。

> おそらく1930年2月下旬のある雨の日、私は陶晶孫と一緒に郁達夫を訪問した。彼は病気でベッドに横になっていた。私は左連結成の準備の件について簡単に説明し、彼に発起人の名簿を見せた。彼は「君たちが私に参加させたいのなら、私は参加しよう。でも、今の私は「冬眠」しているので、何もできない」と話した。実際には、彼はしばらく前に「自由大同盟」の発起

人になったことがあった。彼は「冬眠」しておらず、更に「意気消沈」もしていなかった[17]。

このように、1930年1月下旬、左連結成準備小組のメンバーとして、夏衍と馮乃超は出来上がったばかりの綱領を持って魯迅の意見を求めた段階では、当初、郁達夫を発起人として考えていなかった。一番の原因は恐らく人間関係であろう。以下は鈴木正夫の研究[18]を参考し、郁達夫の創造社離脱前後の状況について簡単に整理する。1926年1月7日、郁達夫は政論「広州事情」[19]を発表し、広州の革命政府の腐敗行為を批判した。しかし、「広州事情」について、2月早々郭沫若は郁に送った手紙で不満を表し、成仿吾も郁達夫に反駁する文章「読広州事情」[20]を書いた。彼らは郁達夫の「広州事情」は、現実の困難を十分に理解していないと指摘した。郁達夫、郭沫若、成仿吾という創造社の元老たちの意見は一致していなかったと言えよう。更に、郁達夫は創造社出版部の内部改造の任務を負って会計上の不正を発見し、若い社員と衝突した。その結果、周全平、葉霊鳳、潘漢年ら（後に左連にも参加）が創造社から脱退した。もう一つ、郁達夫の「対於社会的態度」[21]からは、創造社出版部の財産を管理する成紹宗（成仿吾の甥）に対して、郁達夫が非常に不満であったことが見出せる。更に、郁達夫が発表した無産階級革命を呼びかけ、公然と蒋介石に挑戦した文章（「無産階級専政和無産階級的文学」[22]、「訴諸日本無産階級文芸界同志」[23]、「在方向転換的途中」[24]など）が、後に創造社出版部の成員が国民党司令部に逮捕された直接の要因となった。四・一二クーデター後、郁達夫は暫く杭州に避難し、上海に戻ったのは6月で、彼はすでに創造社出版部の事務を全て引き渡していた。そして、8月15日、「郁達夫啓事」が『申報』にて掲載され、郁は創造社から離脱したことを正式に宣告した。その後、9月、郁達夫は雑誌『民衆』を創刊し、農民文芸を提唱したが、経営不振のため、2ヶ月後に廃刊した。創造社からの離脱は原稿を発表する場を失ったことでもあり、郁達夫はかつて反目し対抗した文学研究会系の雑誌[25]にも寄稿を始めた。この行為も創造社の旧友に揶揄された。このような郁達夫と創造社時代の旧友との不和は、特に創造社メンバーが左連に積極的に参加する状況の中では、郁達夫の名前を発起人に加えなかったことの一因となったかもしれない。

なお、郁達夫は10月から魯迅との協力関係が強まり、1928年6月、雑誌『奔流』（1929年12月停刊）を共同編集して創刊した。二人は密接な関係をそれ以降も保ち続けている。そこには、魯迅が作家としての郁達夫の力を高く買っていたことが見出せるだろう。

また、郁達夫は自分の気持ちとして、「冬眠」しているので、左連に参加しても何もできないから、あまり私に期待しないてほしいと夏衍たちに伝えた。では、この「冬眠」は何を指しているのか。郁達夫は同年2月1日の日記で「すでに春の様子になった。3月からは立春だ。自分の創作力も今から冬眠の絶境を脱出できることを望んでいる[26]」と書いていた。確かに郁達夫は1929年の一年間における小説の創作は、1月に執筆した「在寒風里」の一篇のみである。1921年に小説を発表し始めてから、これは創作数が最も少ない年だと考えられる。彼は1930年初頭の日記で、小説「蜃楼」を頑張って創作していきたいと何回も記していた。従って、ここの「冬眠」とは「創作力の低下」を指している可能性が高いだろう。だが、夏衍は、郁達夫が「冬眠」も、「意気消沈」もしていないと見なしているようなのだ。恐らく夏衍は郁達夫の「冬眠」の意味を左翼運動に対する不活動だと理解している。ここでは、郁達夫と夏衍の「冬眠」に対する理解にギャップが存在している点を看取しておく必要があるのではないか。

ともあれ、郁達夫は左連の発起人の一人になり、そして3月2日（日曜日）午後2時、左連は上海の中華芸術大学において正式に成立した。馮乃超、鄭伯奇、魯迅など郁達夫を発起人に加えようと尽力した人達は会議を主宰し講演もしている。しかし、この日、郁達夫はこの発足の場に参加していなかった。この日については、郁達夫の日記には以下のように書かれているだけである。

> 今日はずっと家にいた。王爺さん[27]は午前中に来てここで昼食を食べた。昼食後は少し昼寝をして、起きた時はすでに4時を過ぎていた。張氏菊齢[28]と夏莱蒂[29]の二人に手紙を書く。北新[30]の来信を待ったが届かなかったので、更に一通の問い合わせの手紙を送った[31]。

左連成立大会の開始は午後2時で、その時、郁達夫は家で昼寝をしていた。左連が成立した当日、郁達夫は特に用事がなかったにも関わらず、出席しなかったのだ。なお、郁達夫はその後も、ほぼ左連の活動に参加したことがない。

実は1930年という年は、郁達夫にとって様々な意味で困難な時期だった。彼の日記から幾つかの例を挙げてみよう。

3月の中旬から6月中旬まで、郁達夫は痔疾のため苦しんでいる。特に5月上旬はほぼ毎日ベッドから離れられなかった。病気のほかにもう一つ郁達夫を悩ませていたことは、3月21日、自由大同盟の発起人となった郁達夫と魯迅たちに対して、浙江省国民党部は中央に、彼らを「堕落文人」として手配させることを請求した。これについて、郁達夫は当日の日記において「私に不利な噂があったため、出かけるのが怖かった。痔疾の治療はどうすればいいのか、今日も悩んで悩んで決めらずにいる[32]」と書いている。

当局からの非難と病気の苦痛に悩まされている郁達夫は、自分の気持ちを4月6日、日記の一文に如実に記していた。彼はこの日記を「自囚日記」と名付けた。内容は以下のようである。

> この三日間以来、こうした幾つかの敵の大連合の結果によって、私は周りに一人もいない泥沼にすでに陥っていた。「天」に叫びたいが「天」はどうして答えることができようか。「同類の者たちよ、私を助けてくれ」と叫びたいが、遠く周辺に立ちながら、機会を待っているのは、それらの長く飢え、酷く渇き、肉を食べ、血を飲む動物たちの牙、雪のように白い牙だ。
>
> 昨日の、あの経験豊富な革命家が私に対して言った言葉は、確かに経験から得た理に適った名言だと思わされた。とにかく、私は先に痔瘻を治さなければならず、その後にようやく次の計画が立てられるのだ。「青山が残るなら、薪を拾う時はいつかくる」、このごく普通の言葉は、当時私を非常に感動させた。
>
> 私はこの地にまで来て、それを牢獄と見なしてしまう理由は、知らない人は私が自分から悩みに行って、わざとロマンチックな夢を見ようとしていると思われたかもしれない。しかし、一昨日の夜の緊急警告と昨日終日聞いた実際の状況は、まさに今回、私が自らを裁かないわけにはいかないと証明しているのだ。だから、こうではないと、悪の社会は悪によって私に制裁を加え、私を強制的に投獄させるのだ。これは自由を大いに愛し、自立を最も重んじている私にとって耐えることができようか[33]。

郁達夫の言葉から、彼が当局の非難を受けてかなり苦しんでいることが分かる。自分の状況が理解されておらず、助けてくれる人もいないと彼は思っている。しかし、「青山が残るなら、薪を拾う時はいつかくる」に励まされた郁達夫は、少なくとも心底ではまだ積極的であることは間違いないだろう。

しかし、4 月下旬までに至ると郁達夫の心情は急激に変化した。4 月 20 日、郁達夫は日記で「慌ただしいこの 20 日間に、内外の憂患が一気に集中した。何度も自殺したいと考えたが、ついには決行できなかった[34]」と書いている。

5 月中は病気と時局のため、郁達夫はほぼ外出しておらず、自宅で読書するのみである。しかし、社会状況への関心は日記に何回も記していた。

6 月になると、9 日に、「痔瘻が九割ほど治った。今朝目覚めると非常に軽やかになっていた[35]」、12 日には、「午後医者に診てもらうと、痔瘻は完全に治ったとのことで、今日から席にまっすぐ座ることができて、これは一日の喜びだと思う[36]」と記している。このように、6 月中旬に至ってようやく病気が治ったため、郁達夫の心情はかなりよくなっていく。15 日には、郁達夫と魯迅、鄭伯奇たちは内山完造の宴会に参加した。その日、彼は自分の小説原稿「没落」が盗まれたことに気づく。怒った郁達夫は 17 日の『申報』にこの事情を記した一文を掲載した。6 月 23 日、周作人に送った手紙でこれに関して話もしている。

以上より、郁達夫の小説創作も、この時期に「冬眠」から復活したと見て良いだろう。7 月に「紙幣的跳躍」、8 月に「楊梅焼酒」、11 月に「十三夜」という具合に三編の小説も完成させている。

このように、郁達夫は心情も回復し、外出や創作活動なども多くなっていたが、左連に関する活動には一度も参加することはなかった。そして、11 月、郁達夫は左連に手紙を送って脱退の意を表した。16 日、左連の第 4 回全体会議が開かれて、その場で郁達夫は除名処分されるに至っている。

このように、郁達夫の左連加盟期は、時間的には 1930 年の 3 月から 11 月まで、僅か八か月間余りという短期間に過ぎない。しかし、郁達夫と左連の関係については、残された問題はいくつかあり、それを検討しておかなければならないと筆者は考えている。それは後期の郁達夫の思想と文学を考える上で極めて重要なことだと考える。次章では郁達夫が除名される経緯について論じてみたい。

II、除名をめぐる問題と左連メンバーたちの態度

郁達夫は当時の中国文壇で知名度が高い作家の一人であることは間違いなく、彼の左連除名は一つの大きな事件だった。本章では、まず除名を決定していた左連第 4 回全体会議の状況について考察しながら、除名された理由について論じたい。また、左連の主要なメンバーたちが郁達夫の除名について、どう見ていたのかについて考察を進めていく。

1，除名について

まず、第 4 回全体会議について、鄭伯奇は 1945 年に記した文章「回憶郁達夫」[37] で、初めて当時の状況を詳細に提示したと言えよう。

> 間もなく文壇には波動が起き、新たな運動が発生した。達夫は新しい運動に早くから共鳴し

ていたので、みな誰もが彼が参加することを望んでいた。達夫の文壇における地位や社会関係が彼を妨害したのかもしれないが、皆はいつも彼がさほど積極的ではないと思っていた。だが団体が成立した時、彼はもちろん参加した。どこから出た話か分からないが、それによれば、彼は徐志摩[38]に「I am a writer, not a fighter!」と話したことがあるとのことだった。この言葉は若い仲間たちの不満を引き起こした。私が主宰していた会議〔左連第4回全体会議〕で、彼を退出させようという提案が通過した[39]。

更に、鄭伯奇は1962年に「左連回憶散記」[40]でもう一度当時の状況を回憶している。

会議である人がこのような意見を提起した。「郁達夫は新月社の徐志摩に、「自分は作家で戦士ではない」と言った。左連の敵に向かってこんなことを表明するのは、自分の資格を取り消すのと同じだ。彼には退出させるべきだ、と」。その時、群衆心理が高まって一斉に賛成の意が示された[41]。

鄭伯奇は左連の幹部であり、会議を主宰していた。彼の回想は信憑性が高いだろう。鄭伯奇により、郁達夫は左連活動に積極的に参加しておらず、そして彼が徐志摩に語った「自分は戦士ではない」という言葉が左連に結集する数多くの成員たちに不満を抱かせたことになる。

会議から6日後の11月22日、『紅旗日報』第91期には、「今月16日午後6時に左連が第4回全体会議が開催された[42]」、その会議の第6項目の決議は、「一切の投機・反動分子を粛清する――且つ郁達夫を除名することをその場で表決する[43]」と記されている。

また、『読書月報』12月1日付掲載の「国内文壇消息」には「郁達夫脱離左連」という文章があり、そこにはこのように記されている。

中国左翼作家連盟が成立した後、そこには郁達夫の名前もあった。しかし、達夫は左連ではほとんど何もしたことがなく、左連の会議にも参加したことがなかったと言われている。また最近、達夫が林語堂[44]、徐志摩らとの宴会上で、「自分は一人の文人であり、一人の戦士ではない」と皆の前で表明したことがあった。同時に、彼は左連に手紙を送って、自分自身は闘争生活を送ることができないので、左連から脱退することを要求するなどを書いてきた[45]。

この記事を掲載した月刊誌の出版元は上海光華書局で、倪墨炎[46]の話によれば、上海光華書局の創立者たちは郁達夫そして左連作家たちと友好な関係を保っており、左連関係の出版物を出版したこともあるので、かなり客観的な記述だと考えられる。つまり、ここで、郁達夫が左連から除名されたことが正式に発表され、除名の理由も明確に記されたと言えるだろう。一番重要な理由は、郁達夫は左連の活動に参加したことがないとした上で、すでに左連に手紙を出して脱退の意を表していたことである。

なぜ郁達夫は脱退したいと考えたのか。当時の左連の活動状況、或いは左連が求める作家とはどのような人間だったのだろうか。ここでは、当時の左連関係の文献資料に基づいて簡単に紹介する。

「中国左翼作家連盟的理論綱領」(1930.3.2)は、左翼文芸家は解放闘争の使命を背負うべきであ

り、作品は無産階級の感情を内容にするべきであり、世界無産階級の解放運動を支持するべきであり、国際反無産階級のような反動勢力と戦うべきであると呼びかけている。「左翼作家連盟五一記念宣言」（1930.5.1）は、左連に対して、「芸術流派的結合」ではなく、一つの「偉大的革命闘争」の結合であると称している。「街頭は私たちの戦場」であり、「世界の労働者と共に帝国主義及びその一切に反対する」こと、「工場や学校でのストライキ、五一示威運動を行う」ことなどと呼びかける。「無産階級新文学運動新的情勢及我們的任務」（1930.8.4）は、国内外の情勢を分析し、左連の全構成員は工場や農村という社会の基層に行くべきだと呼びかけている。また、工農兵通信運動を行い、左翼文学運動はソビエト政権の樹立に務めることを要求している。

以上の資料から、左連は「作家連盟」ではあるけれども、作品創作だけではなく、実際的な無産階級の革命宣伝運動に取り組むことも任務になっていることは間違いない。では、具体的な作家たちの活動はどのようなものだったのか。例えば、『左連回憶録』所収の楊織如「左翼作家在上海芸大」には、以下のような記述がある。

> 当時「左」傾日和見主義路線が実施した示威運動には、一般大衆はもとより参加し、基層の党員や団員、外部の革命団体成員たちも当然参加しなければならない。指導工作に従事する幹部と左翼作家までも参加しなければならなかった。……蔣光慈は幾度も参加しなかったことが、後に党籍を除名された原因の一つになった[47]。

実際、左連のメンバーは青年作家が多数だった。学校での宣伝活動、示威運動（デモ）、ビラ撒き活動が様々に組織されることが数多かったのは確かである。

では、郁達夫の状況はどうだったのだろうか。3月から6月まで、身体的状況から見れば、もちろんこの間、左連の活動に参加しなかったのには客観的な原因が存在すると言える。加えて郁達夫はこの間、当局の非難を避けて家に籠っていた。創作も順調ではなかった。しかし、6月下旬から郁達夫の創作意欲は復活したと思われ、かつ病気も治り外出も増えたにもかかわらず、彼は、引き続き左連の会議などには参加しなかった。その理由は何なのか。ここでは、許雪雪「郁達夫訪問記」[48]に記された郁達夫の言葉を引用する。

> 左翼作家連盟の今回の件について、今になってようやくやっと分かるようになった人が出てきた。当初、皆は左翼作家とは、即ち共産党員の化身だと考えていた。しかし、実のところ全く異なり、もしこのように考える人がいるとすれば、それは全くの誤りだった。左翼作家は左翼作家で、共産党員は共産党員であることは、私たちは分かるはずだ。でも左翼作家の一部に共産党に入党した者もいた。
>
> 左翼作家連盟は、間違いなく、私はその発起人の一人だ。でも、共産党方面は私にとても不満があって、私の作品は個人主義だと言われた。このことは私も認める。私は小資産階級出身の人間だからそれを避けられないのだ。
>
> 後には共産党方面は私を派遣して実際的な仕事をさせようとしたが、ビラを撒くよう仕事は私はすることができないと伝えたので、彼らは私に対してさらに不満になった。だから、左連の中では最近、自ずと「郁達夫」という名前を除き去ったのだ[49]。

郁達夫の言葉によると、左連が自分に対してかなり不満があったことは理解していた。その不満の内容としては、第一に、郁達夫の作品への不満であり、第二に、郁達夫は「実際的な仕事」をやりたくないという、彼の活動に対する不満である。つまり、左連が求める創作内容から実際の運動に至るまで、郁達夫は全て外れていると左連から思われていたのだ。それに、気づいた郁達夫は脱退する気になったと言えるだろう。

2，左連メンバーたちの態度

次に、左連の幹部たちは郁達夫の除名をどのように見ていたのかについて、考察を進めていきたい。実は、郁達夫の除名処分について、武断し過ぎる、厳し過ぎだと考えていた人がいたのだった。

まず、郁達夫の創造社以来の旧友で、左連の幹部、そして郁達夫除名を決定した左連第4回全体会議の主宰者である鄭伯奇の文章から見てみよう。1945年に郁達夫が殺害された後に、鄭伯奇は「懐念郁達夫」[50]でこのように記している。

> 実は、「私は一人の作家であり、戦士ではない」というこの言葉は、厳密に解釈すればもちろん些か適切ではないが、それを解決する方法としては、今から考えると、実のところやり過ぎの嫌いがあった。私が当時、制止できなかったことには、もとより責任を負うべきである。この言葉は、もしこの数年後に口に出されていたら、決してこんな騒ぎを引き起こすことはなかった。
>
> このことが達夫と私の間に明確な境界線を引くことになった。私たちはお互いに疎遠になった。良友公司で趙家壁[51]と『良友文学叢書』の出版を計画した際に、家壁と一緒に彼に会いに行って原稿を求めるようになって、ようやく私たちは正常な付き合いを取り戻した[52]。

また、1950年初頭には、鄭伯奇はこのようにも記している。

> 中国共産党の指導の下に、左翼作家連盟は成立を宣言した。この時期には、自分がした二つのことに対して、少し偏向があったと思っている。一つは、郁達夫が徐志摩に「私は一人の作家であり、戦士ではない」（原語は英語で話された）と言ったことにより郁達夫を除名したことだ。私は当時の主席でもあったので、今でも気が咎める思いを抱いている。もう一つは、茅盾が半年の休みを取って「子夜」の執筆に専念すると告げたことに対して、皆が会議で彼を攻撃したことだ。これもやりすぎた行為だったと思っている。この後、私は左連で「大衆化研究会」の責任者になり、丁玲と張天翼もこの仕事に参加したが特に目立った成果はなかった。私は左連に参加した仕事の状況とは大体このようだった[53]。

鄭伯奇のこの二編の文章により、自分が主宰する会議で、郁達夫の一言のみで彼を除名したことに対しては武断にすぎたと思っており、かなり後悔していることが分かる。

次に、もう一人の左連の幹部、馮乃超の回憶を見よう。

> 郁達夫と言えば、彼は「左連」の発起人に名を列しており、彼を排斥するという問題は発生

していない。ただ、彼は「左連」に参加した後、会議に出席しておらず、ただ名前を掲げていただけだった。馮雪峰によれば、このように話したことがあったそうだ。「馮乃超などが郁達夫に除名処分させると提案したことがあり、私（馮雪峰）とほか何名のメンバーは同意しせず、魯迅も同意しなかった。朱鏡我[54]はこのため馮乃超を批判した」。これはきっと記録人の記憶違いに決まっている。さもなければ、雪峰の言い間違いだった。だから、このようなことが発生したことは全くない[55]。

これは、馮雪峰の自分に関する回憶が間違っており、自分は郁達夫の除名について提案したことがないとの馮乃超の回憶である。実際の状況がどうなのか、現在の資料だけでは明らかにできないところがあるが、以上より、郁達夫を除名処分することは決して自分の望むことではないという、この回憶当時の馮乃超の気持ちは見出せるのではないか。

なお、馮乃超は馮雪峰に言及しているが、では馮雪峰は郁達夫の除名についてどう見ていたのか、もう少し詳しく彼の言葉を引用しておく。

前述したが、左連もまた左傾日和見主義の影響を受けて、やり方を重視せず、人々を団結させることができなかった。ここでは例を挙げる。郁達夫の左連への参加は魯迅が紹介したのだが、彼は参加した後、あまり積極的ではなく、左連に手紙を送って自分は日常的に会議に参加することはできないと書いてきた。文総[56]は会議で郁達夫を除名すると決めた。私は賛成しなかったので投票採決になった。結局、私と柔石など4票だけが反対で、他の人は皆賛成だった。この後、私は魯迅に説明したが、魯迅も文総の決定に同意せず、メンバーは一人でも多くなったほうがいいと考えていた。文委書記の朱鏡我はこのことを知って、文総のやり方に同意しせず、関係する何名かを批判した[57]。

このように、馮雪峰は文総の会議で、郁達夫の除名に反対した人が僅か4人だったと述べている。しかし、前述の馮乃超の回憶によれば、これは馮雪峰の間違いで、実際には生じていない。現在のところ馮雪峰と馮乃超のどちらが事実に近いかは証明できないが、馮雪峰の態度、つまり郁達夫の除名について反対したことだけは見出すことができるだろう。

また、以上の馮雪峰の回憶により、魯迅が文総の決定に賛成しなかったこと、そして、趙家璧の言葉から、郁達夫が除名された後、魯迅はこの結果を聞いても、特に意外には思わなかったこと、魯迅は「郁達夫は闘争的な文章が書けないが、国民党に友好的に扱われることはありえない」と語ったことは確認できるだろう。

つまり、郁達夫の除名について、鄭伯奇、馮雪峰、馮乃超のような当時の左連幹部たちの回憶の中には、共通の部分として、郁達夫の除名はやはり残念であり、そして後悔の気持ちがあったことが看取できる。もちろん、当時の環境下では過激な側面もあったかもしれないが、時間を経て冷静に考えた際には、当時はやはりやりすぎだったと三人とも思っていたのである。

しかし、この中で、郁達夫と最も親しかった魯迅は、予想外に平気であることが興味深い。郁達夫の日記から、この時期彼と魯迅の交流が非常に頻繁だったことが分かる。二人の親密な交友関係は言うまでもなく、左連のメンバーの中で郁達夫の考え方を最も理解している人間が魯迅であるこ

とは明らかだろう。魯迅のこのような態度から見れば、郁達夫の左連から離脱したい心情を既に理解していたのかもしれない。

前述のように、郁達夫は当初から、左連が呼びかける活動に対して積極的ではなく、自分を「作家」だと認識していた。しかし、当時の左連は、彼に対する文学上の評価も高くはなかったのである。お互いに不満が存在したため、郁達夫は脱退の意を表し、その結果、左連は彼を除名処分するに至ったと整理できるだろう。

Ⅲ、郁達夫「私は一人の作家であり、戦士ではない」

前章では郁達夫を除名した左連第4回全体会議の状況を少し詳しく紹介した。その会議で郁達夫が徐志摩らに語った言葉、「I am a writer, not a fighter!」が左連のメンバーたちの不満を引き起こした。また、彼の脱退に関連する新聞記事も、悪気はなかったかもしれないが、この言葉を強調してしまったところがあった。本章では、会議で左連のメンバーたちの怒りを買い、除名の理由の一つになった郁達夫のこの言葉をどう読み取るべきなのかについて考察したい。

まず、郁達夫の脱退の意思に関しては、彼自身も言及したことがある。郁達夫「回憶魯迅」[58]には次のような一文がある。

> 左翼作家連盟において魯迅との結びつきは、実際には私が媒介したのだ。だが、左連が成立した後、私は参加したくなくなった。原因は、私の個性がこのような仕事に適合しなかったからである。私は私自身に対して、はっきりと認識している、私が名前だけ残して、実際の事務をやらないことは、自分では絶対に望んでいないのだ。だから、左連が成立した後、私は一か月以内に、彼らに対して、辞職をすると公然と宣言したのだ[59]。

郁達夫は左連成立後一か月以内に、もうやめたいと左連に伝えたと書いている。これは直接に言葉で伝えたのか、手紙で伝えたのかは分からないが、成立後一か月以内に郁達夫はすでに自分が脱退したい気持ちと示したのである。また、非常に詳しい郁達夫年譜『千秋飲恨』[60]は、1930年11月の郁達夫の活動について、「今月、左連の責任者に手紙を送って、左連に関する会議と活動に参加できない、自ら左連から脱退すると表明した」と記述している。つまり、4月から11月まで、郁達夫の脱退したい気持ちは一貫していた。「原因は、私の個性がこのような仕事に適合しなかったからである」とあるように、郁達夫は極めて自分の「個性」を大事にする人間であった。郁達夫がここで言う「個性」を理解するためにも、「私は一人の作家であり、戦士ではない」という言葉の意味について考察しなければならない。

まず、無視できないのは、郁達夫の「私は一人の作家であり、戦士ではない」の言葉から、自分を「作家」だと定義し、それに誇りを持っていることが見出せる点である。これは魯迅の「彼は非常にいい作家だと思う」という言葉を連想させる。左連は左翼「作家」連盟であり、つまり作家たちの組織である。しかし、その「左翼」からの離脱は絶対に許されない点に最大な特徴がある。「郁達夫訪問記」から郁達夫は、左連は自分の作品を「個人主義」だと批判し、自分の創作を認めていないと考えていることが分かる。この批判について、郁は「避けられないことだ」と答え

た。従って、「私は一人の作家であり、戦士ではない」という言葉は、郁達夫の左連に対する不満を語っていると単純化されて理解されかねないのは確かだろう。左連会議上の青年作家たちが怒る理由も分からなくはない。

しかし、注意すべき点が一つある。それは、郁達夫はほかの場所でも同じ言葉を語ったことがあるということだ。郁達夫「我没有対你們失望」[61] には、このようエピソードが記されている。

> 私は先輩を気取ることはしないし、また私には若者を救う大きな力もない。私はただの一人の文芸工作者にすぎず、自分の立場に立って文章を作りたいだけだ。尚且つ少し心を込めて投稿原稿を仔細に見たいのだ。以前魯迅と一緒に上海にいた時、私はアグネス・スメドレーにこの一言「I am not a fighter, but only a writer」を語ったことがある。これはまさに自由大同盟が孫夫人の家で開会された時のことだった[62]。

このように、1939 年の郁達夫の文章は、この「私は一人の作家であり、戦士ではない」に関わる発言を回憶している。郁達夫は自由大同盟の開会の時にスメドレーに話した言葉だと書いているが、趙家壁の考察により、これは郁達夫の間違いで、実際には民権保障同盟の時だと判明している[63]。「魯迅と一緒に」、「スメドレー」、「孫夫人」（宋慶齢）などの手掛かりから見ても、やはり自由大同盟ではなく、民権保障同盟の可能性が大きいと考えられる。つまり、この発言がなされた時期は 1933 年のはずである。

また、郁達夫の妻王映霞は自伝[64] で、郁達夫が何度も徐志摩に対して「私は一人の作家であり、戦士ではない」と話したことがあると証言した[65]。

とすれば、少なくとも、1930 年の左連加盟期から 1933 年の民権保障同盟の時期、そして 1939 年のシンガポール時期まで、郁達夫は終始この「私は一人の作家であり、戦士ではない」という思いを持ち続けていたと見てよい。これは郁達夫の自分に対する認識だと言っても過言ではないだろう。（この言葉に結実する郁達夫の作家としての姿勢については、今後、別の機会に詳しく考察したいと考えている。）

では、ここから見れば、郁達夫のこの言葉は単に左連に対する不満を示した言葉ではないと分るが、当時は除名される理由にはなってしまった。前章で引用した左連関連文献資料と楊絳如の回憶からも分かるように、当時の左連に求められる作家の姿は、無産階級文学を創作するとともに、実際的な宣伝運動などに参加できる人間だった。郁達夫の「個人主義」と言われた作品と活動不参加は左連の方針に相応しくはなかった。また、もう一つ無視できないことは、郁達夫が資産階級文学の代表人物とされた、林語堂、徐志摩らとの宴会上でこの言葉を話した点である。では、たとえ郁達夫のこの言葉は自分に対する認識であって、左連への不満ではなかったとはいえ、当時の郁達夫の辞めたい気配や活動不参加、そして林、徐に向けた発言だったことなどの状況を含めて、「私は一人の作家であり、戦士ではない」に怒りを感じた左連のメンバーたちは、この言葉を口にした郁達夫は、自ら左連の構成員たる資格を取り消す[66] ものだと理解したのではないだろうか。

以上のように、左連が郁達夫の言葉を受け取れなかった状況を整理した上で、ここでは、李麗君による 1920 年代後半の郁達夫の「左翼化」をめぐる考察を引用したい。

> 彼の場合、時代の大きな流れに巻き込まれた部分があり、一時的に当時の社会体制に対する

批判、つまり一種の社会批評・批判意識に基づいたある政治勢力、ある社会体制に対する批判、つまり一種の社会批判・政治批判であった。それをマルクス主義信仰と結びつけたり、彼の国民党批判を「進歩的」「革命的」という基準で判断したりすることは、あまりにもイデオロギー化しすぎなのではないだろうか。この時期の郁達夫は、文学者としての姿と、権力への懐疑者、批判者、政治に情熱を燃やす論客としての姿が矛盾しながらも重なりあっていたように思われる。

このように、1920年代後半の郁達夫の「姿」について、「文学者」と「論客」という矛盾している部分と重なり部分の両方があることを論じている。しかし、これ以降の郁達夫の「姿」はどうなったのだろうか。郁達夫の「私は一人の作家であり、戦士ではない」という言葉におけるその「作家」と「戦士」への理解とは、まさに郁達夫の文学観、文学への向き合い方を示しており、彼のその後、すなわち後期の文学営為を考察する上で不可欠な論点になるのではないだろうか。「私は一人の作家であり、戦士ではない」、この言葉は左連からの除名／脱退をめぐる一つの要因であるだけではなく、まさに後期の郁達夫について、彼の本質を体現し得る視座ではないかと筆者は考えている。

おわりに

郁達夫は左連の発起人であるが、左連の活動に対して積極的ではなく、脱退の意思を左連に伝えたところ、左連は第4回全体会議で郁達夫を除名処分にした。本論はまず、郁達夫の1930年の左連加盟期、つまり参加してから脱退するまでの経緯を考察した。次に、左連第4回全体会議の状況を考察し、この郁達夫を除名する決定について左連メンバーたちの態度を見直した。左連にとって郁達夫は、求められる左翼作家とは異なっていること、郁達夫にとって左連は、自分の創作が受け入れない状況になったことを感じさせた。やはり左連と郁達夫の間には互いに不満が存在していたからこそ、この除名処分に至ったのだろう。しかし、この除名処分はやはり武断に過ぎ、厳し過ぎたと考えた左連メンバー達も多く、後悔していたことも事実だった。最後に、左連には受け入れられなかった郁達夫の言葉「私は一人の作家であり、戦士ではない」を、当時の郁達夫の置かれていた状況を踏まえて読み直しさえすれば、これは郁達夫の自分に対する認識であり、左連への不満を表明したのではないことが見出せるだろう。では、郁達夫が言う「作家」と「戦士」とはより具体的には何を指しているのか。これを明らかにするには、郁達夫の左連離脱後の創作と経験に即して具体的に考察しなければならない。稿を改めて論じる準備を進めていることを付記しておく。

注

1）服部担風、1867年12月21日–1964年5月27日。明治・大正・昭和にかけて活躍した漢詩人・書家。
2）北新書局により出版される。1929年第1巻『寒灰集』、1929年第2巻『鶏肋集』、1930年第3巻『過去集』、1930年第4巻『奇零集』、1930年第5巻『敝帚集』、1931年第6巻『薇蕨集』、1933年第7巻『断残集』。
3）伊藤虎丸・稲葉昭二・鈴木正夫編『郁達夫資料総目録附年譜』東京大学東洋文化研究所付属東洋学文献センター、1990年。なお、以下、人名は敬称を略させていただく。
4）鈴木正夫『スマトラの郁達夫：太平洋戦争と中国作家』東方書店、1995年。

5）大東和重『郁達夫と大正文学〈自己表現〉から〈自己実現〉の時代へ』東京大学出版会、2012 年。
6）陳子善、王自立『郁達夫研究資料』花城出版社、1985 年。
7）郭文友『千秋飲恨　郁達夫年譜長編』四川人民出版社、1996 年。
8）『郁達夫全集』浙江大学出版社、2007 年。
9）1927 年 1 月 17 日、新聞『洪水』に載せた広州の革命政府を批判する文章。
10）鈴木正夫『郁達夫　悲劇の時代作家』研文出版、1994 年。
11）李麗君『郁達夫の原像―異文化・時代・社会との葛藤』花書院、2016 年。
12）楊杏佛（1893 年 5 月 4 日-1933 年 6 月 18 日）。革命家。1933 年 1 月、宋慶齢、蔡元培、魯迅と「民権保障同盟」を組織し、幹事長となった。同年 6 月、国民党に暗殺された。
13）原文「魯迅和我，都是這自由大同盟的発起人，後来也連任了幾任的干部，一直到南京的通緝令下来，楊杏仏被暗殺的時候為止」。
14）夏衍「左連成立前後」、『左聯回憶録』中国社会科学出版社、1982 年。
15）原文「接着他又看了発起人的名単。有些他不認識的人，我們一一作了介紹，他也没有表示不同意見。最後他提出為什麼没有郁達夫参与発起？我們説，郁達夫最近情緒不好，也不経常和一些老朋友来往。魯迅聴了以後，很不以為然地説：“那是一時的情況，我認為郁達夫応当参加，他是一個很好的作家。”我們表示同意。不過我們説這還得征求他本人的意見，魯迅也賛成」。
16）夏衍「憶達夫」、『人民日報』1985 年 9 月 16 日。
17）原文「大概在二月下旬的一個雨天，我和陶晶孫一起去看他，他病臥在床上，我簡単地把籌備成立“左聯”的事告訴他，併讓他看了発起人名単。他就説：妳們要我参加，就参加吧，不過我正在“冬眠”，什麼事情也做不了。事実上，他不久前還当過“自由運動大同盟”〔自由大同盟と同じ〕的発起人，他没有“冬眠”，更没有“意気消沈”」。
18）鈴木正夫『郁達夫　悲劇の時代作家』、1994 年、研文出版。
19）『洪水』第 25 期。
20）『洪水』第 28 期、1927 年 3 月。
21）『北新』第 2 巻第 19 期、1928 年 8 月。
22）『洪水』第 26 期、1927 年 1 月。
23）日本の雑誌『文芸戦線』、1927 年 4 月。
24）『洪水』第 29 期、1927 年 4 月。
25）鈴木正夫「創造社と研究会の対立は、一般に達夫が新聞に出した『創造季刊』の出版予告に「文壇を垄断している者がある」云々の文字があったのが発端だとなされている」。
達夫は 1927 年のうちに次の 4 篇を研究会系の雑誌に載せている。
「古代人序」（『文学週報』第 5 巻第 7 期）
「五六年来創作生活的回顧」（『文学週報』第 5 巻第 10 期）
「一女侍」（翻訳）（『小説月報』第 18 巻第 10 期）
「二詩人」（『小説月報』第 18 巻第 12 期）。
第 89 頁の注 5）参照。
26）『郁達夫全集』第 5 巻『日記』、274 頁。浙江大学出版社、2007 年。原文「是春天的様子了，三月後就立春，我希望自己的創作能力也能夠従此而脱出冬眠的絶境」。
27）郁達夫の妻王映霞の祖父。
28）張菊齢、当時杭州市長周象賢の妻。
29）編集者、郁達夫と一緒に雑誌『大衆文芸』を編集した。
30）北新書局。
31）原文「今天在家里看了一天的家。王老於午前来，在這里吃午飯。飯後小睡，起来的時候，已経是四点多了。作張氏菊齢及夏莱蒂二人書。候北新来信，不至，又写了一封信問去了」。
32）原文「因有不利於我的謡言，所以不敢出去。今天還是猶豫未決，対於痔漏，究将如何医治」。
33）原文「三数日以来，因為這種種敵人的大聯合的結果，我已経陥入在一個四顧無人的泥漿深沢里了。我想叫“天”，天有那能夠回声答応？我想叫一声“同類者，救我一救！”然而四面遠遠地站着在等候機会的，却都是些飢的很久，渇得很烈的啖肉飲血的動物的獠牙，雪白的獠牙！／昨天的那一位老革命家対我之所説，想起来実在是一種由経験得来的至理名言，我総要先行医療好我的痔漏，然後才能作進一歩的打算。“留得青山在，総有採樵時”，這両句很普通的話，当時実在讓我感動。／我之所以要遷入此地，要視他為牢獄的理由，不知者或与要説我在自尋煩悩，在故意的作浪漫的夢，然而，前天晩上的那危機的警告，昨天一天所聴到的実際情況，豈不都是在証実我的這一次的不得不自裁，不得不自決麼？因為，不如此，悪社会就要加我以悪制裁，強迫我入獄去了，這豈是

酷愛自由，最重自立的我之做能忍受的」。
34）原文「匆匆二十天中，内憂外患，一時倶集，曾幾次想謀自殺，終不能決行」。
35）原文「痔漏医好了九分，早晨起来隻覚得一身軽快」。
36）原文「午後去看医生，痔漏総算全好了。……従今天起，可以在坐位上直坐了，総算是一天之喜」。
37）鄭伯奇「懐念郁達夫」、1945 年 12 月。『書報精華』第 12 期に載せる。
38）王映霞は徐志摩を語った時、このように話したことがある。
徐志摩と郁達夫とも 1896 年に生まれ、1922 年杭州府中学の同じクラスで勉強する。この後、郁達夫は日本に留学、徐志摩はアメリカに留学した。二人の趣味は近いから、友情も深い。
39）原文「不久，文壇起了波動，新的運動発生了，達夫対新運動早有共鳴，大家都希望他能参加。也許是達夫在文壇的地位和他的社会関係妨礙了他，大家総覚得他不甚積極，但是当団体成立的時候，他当然参加了，不知由哪里伝出来的話，拠説，他曾対徐志摩説過：I am a writer, not a fighter! 這句話引起青年朋友們的不満。在我主持的一次大会上，通過了請他退出的決議案」。この「I am a writer, not a fighter」は、以下「私は一人の作家であり、戦士ではない」と訳すことにする。
40）『新文学史料』、1982 年第 1 期に載せる。
41）原文「会上有人提出這様的意見：郁達夫対新月社的徐志摩説：“我是作家，不是戦士。”向左聯的敵人公然這様表示，等於自己取消資格，応該請他退出。一時群情激動，紛紛表示賛成」。
42）原文「本月 16 日下午 6 時左翼在会所開第四全体大会」。
43）原文「粛清一切投機和反動分子──併当場決定開除郁達夫」。
44）王映霞は林語堂を語った時、このように話したことがある。
林語堂は生活に対して高い質を求めている。彼は当時、庭園付きの洋風家屋に住んで、出かける時も自動車を使う。彼もよくダンスホールに行く。
45）原文「中国左翼作家聯盟成立之後，郁達夫亦有名字在里面，不過聴説達夫在左聯併没有做過什麼事情，左聯的会議，他従未参加過。近来達夫在林語堂、徐志摩等宴会上，曾当衆表示：“自己是一個文人，不是一個戦士。”同時，他又写信給左聯，説他自己因為不能過斗争生活，要求脱離関係雲」。
46）倪墨炎「郁達夫是主動脱離左連的」、『人民日報』1985 年 10 月 24 日。
47）原文「当年“左”傾機会主義路線搞得示威運動，普通群衆固然参加，基層党団員、外囲革命団体成員当然也必須参加。連作領導工作和左翼作家也得参加。……蔣光慈就是因為多次不去而構成他後来被開除党籍的因素之一」。
48）1933 年『文学新聞』第 3 期。
49）原文「関於左翼作家聯盟的這回事，到現在才有人漸漸的明白過来。在先，大家総以為左翼作家就是共産党員的化身，其実不然，如果有人要這様想，那就完全錯了。我們得明白，左翼作家是左翼作家，共産党員是共産党員。不過左翼作家中的一部分加入共産党是有的。／左翼作家大同盟，不錯，我是発起人中的一個。可是，共産党方面対我很不満意，説我的作品是個人主義的。這話我是承認的，因為我是一個小資産階級出身的人，当然免不了。／後来，共産党方面要派我去做実際工作，我対他們説，分伝単這一類的事我是不能做的，於是他們就対我更不満意起来了。所以在左翼作家聯盟中，最近已経自動的把“郁達夫”這名字除掉了」。
50）1945 年 12 月。『書報精華』第 12 期に載せる。
51）『良友文学叢書』の主編。郁達夫、魯迅の作家たちと友好な関係を保っている。
52）原文「“我是作家，不是戦士”這一句話，厳格解釈起来，固然有点不妥，而解決的弁法，至今思之，実嫌過火。我在当時不能制止，自然応該負責。這句話若以後幾年説出来，絶不引起這様的波瀾。／這件事給達夫和我的中間劃了一条鴻溝。我們彼此疎遠起来了，一直在良友公司跟趙家璧計劃出《良友文学叢書》的時候，我同家璧去看他，向他要稿子，我們才又恢復了正常的来往」。
53）鄭伯奇『我的文学経歴』、原文「在中共的領導下，左翼作家聯盟乃宣告成立。在這時期，我覚得有両件事作的有偏差。一件事因為郁達夫対徐志摩説“我是個作家，不是戦士”（原語是用英文説的）便把郁達夫除名，而我又是主席，至今覚得負疚。還有一件，茅盾告仮半年，専心写《子夜》，大家曾開会攻撃。這也是過火的挙動。後来，我在“左聯”僅負“大衆化研究会”的責任，丁玲、張天翼都参加這個工作，但併没有什麼成績。我参加“左聯”的工作情形，大概如此」。『新文学史料』、1995 年第 4 期。鄭伯奇の息子鄭延順の推測によれば、この文章は 1950 年初に書かれていた。
54）1927 年 10 月創造社に入社する。1928 年 5 月中国共産党員になる。後には文委の幹部になる。文委、即ち中国共産党の指導の元に、1929 年 6 月に成立した「中央文化工作委員会」である。
55）原文「至於郁達夫，他列名於“左聯”的発起人，更不発生排斥他的問題。不過，他在参加“左聯”之後，併不参加会，隻掛個名，拠馮雪峰説：馮乃超等提議開除他，馮雪峰和幾個盟員都不同意，魯迅也不同意；朱鏡我為此還把馮乃超批評了一頓，這肯定是記録人記錯，不然就是雪峰説錯，因為根本没有発生過這様的事」。馮乃超

「革命文学論争・魯迅・左翼作家連盟―我的一些回憶」、『新文学史料』1985 年第 3 期。

56）1930 年-1936 年、1930 年 10 月に成立した。中国共産党「中央文化工作委員会」（文委）が指導した文化団体。中国左翼作家連盟も文委に属した団体である。

57）原文「前面説過，左聯也受到左傾機会主義的影響，不講策略，不会団結人。這里挙一個例子。郁達夫参加左聯，是魯迅介紹的，他参加後不大積極，写信給左聯説他不能常来開会。文総開会決定開除郁達夫。我不賛成，於是投票表決。結果隻有我、柔石等四票反対，其他人都賛成。事後我対魯迅講了，他也不同意文総的決定，認為人手多一個好一個。後来文委書記朱鏡我知道此事，不同意文総的做法，批評了有関的幾個人」。馮雪峰「馮雪峰談左連」、『新文学史料』1980 年第 1 期。

58）郁達夫は 1938 年 8 月から書きはじめて 1939 年 7 月まで完成した魯迅に関する回憶録。1938 年上海『宇宙風』に連載した。

59）原文「在左翼作家聯盟，和魯迅的結合，実際上是我做的媒介。不過左聯成立之後，我却併不願意参加，原因是因為我的個性是不適合於這些工作的，我対於我自己，認識得很清，決不願担負一個空名，而不去做実際得事務；所以，在左聯成立之後，我就在一個月之内，対他們公然的宣布了辞職」。

60）注 7）参照。

61）『星洲日報』、1939 年 1 月 25 日。

62）原文「我不敢自居於前輩，我也没有救孩子們的大力，我不過是一個文芸工作者，隻想站在自己的崗位上做点文章，併且也用点心思，細細看看来稿，従前和魯迅一道在上海的時候，我曾対史沫特萊女士説過一句話：'I am not a fighter,but only a writer.' 這是当自由大同盟正在孫夫人家開会的時候」

63）趙家璧「回憶郁達夫与我有関的十件事」、『新文学史料』1985 年第 3 期。

64）『王映霞自伝』、杭州文芸出版社。1996 年。

65）原文「郁曾不隻一次坦白地対徐説，“我是一個作家，不是一個戦士”」。

66）注 39）参照。

（本学大学院博士後期課程）